

「自己家畜化論」から「総合人間学的本性論・文明論」へ
小原秀雄「自己家畜化論」の再検討と総合人間学的理論構築のための一試論
From the “Theory of Self-Domestication” to the
“Synthetic Anthropological Theories on Human Nature and Civilization”
Rethinking of the Obara’s “Theory of Self-Domestication” and
a Trial Article for Constructing Synthetic Anthropological Theories

上 柿 崇 英

UEGAKI, Takahide

1 はじめに

筆者は以前「学問としての『総合人間学』の課題」という表題のもと、総合人間学が“ひとつの学問”としてこの先存在感を持って生き残っていくためには、次の一步として何が必要となるのかについて論じたことがある（上柿 2013）。そこで明らかにしたかったのは、第一に総合人間学における“総合”とは、個別具体的なテーマ——例えば「科学技術」や「平和」といったもの——を分野横断的に議論するといった直接的な形式で行うものではなく、独自の理論的枠組みを議論の参照点として媒介させながら、その理論的枠組みの構築を“総合的”に行うという、いわば間接的な形式で行うべきものだということ、そして第二に総合人間学に必要な次の一步とはまさに、この独自の理論的枠組みの構築に他ならないということであった。この小論の末尾において、筆者は小原秀雄の「自己家畜化論」が、その一步を実際に踏み出す最初の手がかりとなることを示唆した。この提起の具体的内容を示すのが本論の目的である。

一般的に“自己家畜化論”は、家畜と人間の類似性を手がかりとしながら人間の特性を説明する議論

として知られている。この自己家畜化（self-domestication）概念はもともと1930年代のドイツの人類学に由来し、わが国では1970年代になって知られるようになった。そして本論で取り上げる小原秀雄の「自己家畜化論」は、この概念を独自の仕方発展させたものであると一般的には知られている。

しかし本論が着目したいのは、小原が自己家畜化をどのように論じたのかということではない。むしろ彼が「自己家畜化論」という形で積み上げてきた、彼の人間というものに対する想像力、自己家畜化の概念によって見えにくくなっている、彼が構想した独自の枠組みの部分である。後に詳しく見るように、例えばそれは、人間存在の本質として、生物的局面である「ヒト」と社会・文化的局面である「人間」を区別しながら、人は「ヒト」を包含しつつ社会によって「人間」になるとする「人間（ヒト）」の概念であり、「人間（ヒト）」は、その自然史的特性として、単なる自然生態系からの影響だけでなく、人間自身が生みだし、世代を越えて蓄積されていく「モノ」の影響によって独自の進化過程をたどるとする「自己人為淘汰」の概念であり、「人間（ヒト）」

に相応しい存在様式、すなわち人間存在の「自然さ」というものを問題とすることで、「自然さ」との整合性を失いつつある現代文明のライフスタイルを批判する「自己ペット化」の概念である、といっている。

彼の人間に対する洞察の中には“人間”，“社会”，“自然生態系”それぞれの関係性を捉える、極めてユニークな着想が含まれている。例えばわれわれはそこから、生得的かそうでないかといった二元論に収まらない独自の人間本性への理解の視点や、「人間（ヒト）」によって生み出されながらもその存在形態を規定し、同時に自然生態系に基礎づけられながらも、そこから自立的に振舞う「社会」（あるいは「文明社会」）というものに対する独自の視点を読み取ることができるだろう。筆者はこの小原の枠組みが、総合人間学独自の理論的枠組みを構築するにあたり、非常に重要な示唆を与えるものと考えている。ここには「総合人間学的本性論」あるいは「総合人間学的文明論」とも呼ぶべき、独自の理論的枠組みを構想するための萌芽が含まれているのである。

しかしそのためには、われわれは一連の小原の枠組みを再検討していく必要がある。われわれは最初に、小原の「自己家畜化論」を構成している三つの中心的な論点、すなわち「人間と家畜の類似性」、「自己人為淘汰」、「自己ペット化」を注意深く区別する。そしてこれらの論点のうち、二番目のものを部分的に、また最初のもの全面的に、いったん放棄することを提案する。実のところ、小原の人間学の“アキレス腱”となっているのは、他ならないこの自己家畜化概念なのである。しかし「人間と家畜の類似性」に言及せずとも、小原が残した想像力は、上記のように総合人間学に相応しい理論的枠組みと

して再構築できる。本論では以上のことを論じたい。

2 「自己家畜化論」における三つの論点

(1) 「自己家畜化論」の出現

“自己家畜化（self-domestication）”という概念がわが国で最初にまとまった形で取り上げられたのは、おそらく人類学者の江原昭善による「自己家畜化現象——ヒトはどこまで家畜か」（江原 1971）においてである。江原はそこで自己家畜化について、それが 20 世紀初頭のドイツ人類学に由来し、1934 年にアイクシュテット（v. Eickstedt）によって名付けられたことを挙げながら、次のように説明する。

家畜化は「生物とそれを取りまく環境といった直接的関係が、人為的意図を持った操作か条件で間接化され、それが世代を越えて方向付けられ、定着した場合、同じ生物学的な類縁種でも野生種と家畜種の相違として現れてくる」現象であり、自己家畜化とは、同じような現象が、「野生の状態から脱し、直接的な自然環境から遠ざけられ、間接的な生活諸条件の中にある」われわれ人類においても見ることができ、まさにそれこそが「人類形成（hominization）」をもたらしたとする説のことである。動物は人為によって家畜化していくが、人間の場合、自らが作り出す文化がその人為に相当する役割を果たす。つまり人間は家畜化と似たことを、実は人間自身に対して自ら行っているのであり、それゆえ自己家畜化なのである。

注目したいのは、自己家畜化の議論においては、実際に人間の形態的特性の中に、家畜ときわめて似た特徴が現れているとされる点である。例えば江原は、人間と家畜の共通点として体毛・皮膚色素・身体大きさなどにおける変異性の増大、警戒心の喪失、性周期の乱れなどを具体的にあげている。とは

いえ江原自身の目的は、この形態的類似性という同じ文脈から、ヘレ (W. Herre) の説を用いて、むしろ自己家畜化を批判することにあつた。つまり人類が脳を肥大化させながら進化したことはよく知られているが、それとは逆に、一般的に家畜化は脳を縮小させる。それを反例として、自己家畜化概念の限界を指摘したのである。

江原の論文の副題(「ヒトはどこまで家畜か」)が象徴するように、自己家畜化の提起する内容には、非常にセンセーショナルで論争的な要素が含まれている。例えばもし、このような「家畜化」が人間の本質だとするならば、人間の自由な意志、主体性とはどうなってしまうのか。一步誤れば、人間は「家畜」のように“社会”に対して従順であるべきだ、といったことになってはしまわないか。そこにはわれわれの心理的反発を呼び覚ますだけの十分な響きがあるだろう。例えば人類学者の尾本恵市を中心としたグループは、自己家畜化を積極的に用いて議論を展開するものの、それは現代文明下の人間を考えるためのあくまでメタファーであると初めに断りを入れている(尾本 2002)。

しかし自己家畜化を単なるメタファーとしてではなく、むしろ人間を総合的に論じていくためのより積極的な概念として用いたのが小原秀雄であつた。小原はもともと哺乳類の研究者であり、彼の動物学への貢献は60年代の『動物社会記』(1961)や『動物の科学』(1968)を初めとした数々の著作でも確認することができる。小原は70年に書かれた二つの論文においてすでに「自己家畜化」について言及し(小原 1970a : 284, 1970b : 251)、それ以降の『環境と人間』(1978)、『街のホモ・サピエンス』(1981)、『自己家畜化論』(1984)、『ペット化する現代人』(1995)、『現代ホモ・サピエンスの変貌』

(2000)などにおいて、繰り返しこの概念を発展させてきた。小原は動物学的研究の到達点として「自己家畜化論」に行き着いた。彼にとって自己家畜化は、人間という動物の自然史的／自然誌的特性であり、その本質として映ったのである。

われわれはここから小原が展開した「自己家畜化論」の要点を確認していく。ただし先に述べたように、ここでは「人間と家畜の類似性」、「自己人為淘汰」、「自己ペット化」という三つの論点を注意深く区別しながら整理していくことにしよう。

(2)「人間と家畜の類似性」という論点

この最初の論点である「人間と家畜の類似性」には、大きく“形態的類似性”と、“原理的類似性”という二つの側面がある。われわれの目につきやすいのは前者の方であろう。というのもそれは、江原の議論のように自己家畜化現象の“根拠”としてしばしば引き合いに出され、特にこの概念を科学的なものとして扱うためには不可欠な論点となるからである。実際小原もこの論点については繰り返し言及しており、例えば『自己家畜化論』であげられているものだけでも、性周期の乱れ、過剰な性行動、過剰摂食、肥満、薄い体毛、部分的な長毛化、大きな乳房などがある。

小原は江原の議論にもあつた「脳の肥大化における矛盾」についても、繰り返し反駁を試みている。例えば『現代ホモ・サピエンスの変貌』の該当箇所を見てみよう。

「家畜動物は一般的に従順に扱えるように選択しているのであり、ヒトはこうした淘汰圧は働かなかった。むしろ道具使用の日常化とともに、対象に働きかけることによる、脳の働きと手で創る働

きとの相互進化（生物の普遍的法則の一つ）があったとみなせないかとの、ヘレへの反論が可能だろう。」（小原 2000：132-135）

つまり家畜と人間の形態的類似性は自己家畜化を支持するものだが、そこに反例があったとしても、それが自己家畜化そのものの否定材料になることはないというのである。この小原の主張は一見矛盾しているようにも見えるが、そうではない。なぜなら小原にとって自己家畜化の本質とは、人間進化の“プロセス”，いわば“原理”や“仕組み”のことであって、形態的類似性とはあくまでそのプロセスの結果として現れるものの一側面に過ぎないからである。小原にとって「人間と家畜の類似性」は、まずもってその“原理”の部分にあるのである。

(3) 「自己人為淘汰」の概念

このことをより正確に述べるために、小原が導入したのが「自己人為淘汰」の概念である。小原がこの概念を初めて全面的に取り上げたのは、おそらく「人間の自己人為淘汰について」（1973）だろう。

「自己家畜化とは、人工環境への人類の適応の結果である。そこで受けている淘汰は、自己家畜化の一過程ではあるものの、淘汰のしかたの規定でもある。人為的淘汰によって家畜が生み出され、結果として家畜化するようになったこととて、人間の淘汰によって人間自身が現在のように変化した。このことから、その部分に働くのが自己人為淘汰の法則性であると見なせる。」（小原 1973：93）

興味深いのは、この「自己人為淘汰」の概念の中

に、人間存在にとっての“社会”とは何かという問いに対する、小原独自の観点が含まれることである。まず自己家畜化概念に当初から含まれた原理的局面、それは家畜も人間も自然環境との間接化を媒介してきたという観点であった。なるほど人類は自然に手を加え、常にそれを人工的な環境に置き換えてきた。例えば農耕とはまさに「人工的生産物として生物を生産し、人為的食物連鎖に基づいて生物界を構成し、地域的に生産関係の生じた上に狩猟採集時代の分配供給システムを組み込む」（小原 1984：75）ものであろう。それは自然環境と人間を媒介する人工環境のひとつであり、そこに定着し世代交代をしていくことで、人間自身もまた変わって行く。人間においては、「人間存在のすべての在り方が、社会システムに組み込まれながら、しかも自分でそれを作り出している」（小原 1984：73）わけである。

後に小原は、この「自己人為淘汰」をもたらし人工環境のことを「モノ」と呼ぶようになる。「モノ」とは、「人工生態系」であり「社会化された自然」（小原 1985：13）であり、「抽象的な言語なども含めて、人間の作ったすべてを指す」（小原 1995：139）。興味深いのは、小原が「モノ」の根源とは「道具」であり、すべての「モノ」は「道具とその派生物」（小原 1995：126）であるとしている点である。ここでの「道具」の最古のものは石器であろう。しかしその派生物として人間の創造したあらゆるもの、耕地や都市といった構造物だけでなく、制度、言語、概念、思想といった「精神文化」（小原 2000）なども、そこには含まれるというのである。これも一見奇異な主張のようにも見えるが、やはり重要な意味がある。なぜならこれらは人間が作り出し、世代を越えて社会的に蓄積し、そこで生まれ育った人間を規定していくという点では、いずれも共

通しているからである。要するに小原の一連の議論には、「道具」を含み、人間と自然との相互作用を媒介し、「社会淘汰」(小原 1973)を引き起こす、人間学的な意味での「社会」の概念がある。さらにこの文脈においての「社会」は、「種としてのヒト」の存在形態における、「広義の暮らし場所(ハビタット)」に相当する。それは特定の生物種が生命体としてのみそこに在るのではなく、特定のしかるべき生息環境と結びついて初めて真に実存するといえるのと同じように、「種としてのヒト」にとって、きわめて本質的なものとなるのである。

「各種は自然界の中で特定の関係(食物関係など)を持って生存している。いわゆる生態的地位であり、種の自然における位置の現実的具体的な生態的存在形態である。広義の暮らし場所(ハビタット)と種自体との関係を指す。……ヒトは自然における位置でいえば、他のすべての動物とは質的に異なる世界を持つに至った。人為的な世界、自らが作り出した社会化した特殊な『自然における』位置を持つようになったのである。」(小原 2000 : 56-58)

「自己人為淘汰」の概念には、このように人間存在の本質をめぐる論点が含まれている。その点で重要なのは、小原が常に「ヒト」と「人間」とを区別してきたこと、「ヒト」に成るという意味での「ヒト化(ホミニゼーション)」と「人間」に成るという意味での「人間化(ヒューマニゼーション)」を明確に区別してきたことである(小原 1985 : 7, 2000 : 124)。この区別が重要なのは、人間とは、生物学的な「ヒト」であると同時に、常にそれを内に含む形で「人間」として実存するということを明示

するためでもある。この小原の想像力を象徴する一文が初期の論文「人間とは何か——人間学の建設のために」(1970b)の中にある。

「ロビンソン・クルーソーがもし本当に孤島に隔絶され、赤ん坊の時代からそこで育ったならば(育ったと仮定してであるが)、彼は人間であろうか。おそらくヒトではあるが人間ではないだろう。……[彼は]他の人間(社会)の中で育てられなければならなかっただろう。少なくとも知能を働かすために、彼は人間と接触して人間的になっておく必要があった。……[もし彼に]その機会がなかったならば、形は人間でありヒトであっても、あるいは何一つできずに死ぬ可能性さえある。」(小原 1970b : 263, []内は筆者)

ここから理解できるのは、自己家畜化で問題にしている“プロセス”とは、「ヒト化」ではなくあくまで「人間化」の局面である、ということである。「自己人為淘汰」を引き起こすという特性、人間が「社会」において実存するという存在様式を、われわれの遠い祖先が何らかの自然史的要因によって獲得した局面が「ヒト化」なのであって、「ヒト」が「自己人為淘汰」を介して「人間」と成るのが「人間化」である。「社会」がなければ「ヒト」は「人間」にはなれないが、「人間」はあくまで「ヒト」としての原理に基づいている。小原が「人間(ヒト)」という表記を用いるのはこのためである(小原 1985)。

(4)「自己ペット化」の概念

これまで見た「自己人為淘汰」は人間進化の原理的説明のための概念であったが、「自己家畜化論」

には、平行してきわめて強い社会批判のための概念が含まれている。それが「自己ペット化」である。

小原はしばしば現代人を「サンゴ虫」（小原 1995：176）と揶揄しているが、それは人間の作り出した「モノ」が膨張し、効率よく快適に過ごすための無数の道具や設備となり、ライフスタイルのあらゆる面で間接化が起っているからである。それは個体の周囲が「モノ」で覆い尽くされるという意味では「カプセル化」（小原 1995：179）と言うこともできる。確かにこのような現代的ライフスタイルは、「自己人為淘汰」の繰り返しによってもたらされた、その意味では“自己家畜化の現代的位相”とも呼べるものであろう。注目したいのは、小原がそれを人間存在の本質からして病理的な状態であると見なしている点である。例えば小原は、「自己ペット化」がもたらす具体的な症状として、子どもにみられる「依存性」、「体力の低下」、「遊び方の喪失」など（小原 1984）、また「現代的いじめ」（小原 1995）、あるいは「むなしさ」、「空虚さ」、「衝動的な自殺」など（小原 2000）をあげている。確かにこれらの記述は直感的で曖昧な部分が多い。しかし重要なのは、小原が「自己ペット化」の概念を、「インプリント」や人間の「自然さ／ナチュラルさ」といった概念を媒介させることで、社会病理を説明するための概念として巧妙に展開させた点である。

まず「インプリント」とは、もともとローレンツ（K. Z. Lorenz）の概念であり、例えば鳥の雛が親鳥と間違えてデコイの後をついて回るように、動物が特定の条件下で特定の行動を形成する「刷り込み」のことである。「インプリント」される行動は、遺伝的に準備されたものでありながら、その発現の形が後天的に決定されるという意味で、単なる学習でも、単なる本能でもない。それは「リリーサー（解

発因）」と呼ばれる信号によって「遺伝的に備えていたワクのある行動が、現実的行動型として形成されて定式化」（小原 2000：20）するものであり、「たとえば餌になる動物が出てきて、それに対して攻撃すると獲物を得る」ように、信号によって行動が解発され、「いつも適合した行動が自然状態ならばできるようになっている」（小原 1984：90）。そして人間もまた、この「インプリント」のメカニズムを持っているのであり、人間の場合、「リリーサー」は、「単純な一つの信号だけでなく……ヒトが造り上げるシチュエーション、全体状況」（小原 1984：91）という形で必要となる。このことは、先に見たように、なぜ「人間化」には「社会」が必要なのか、なぜロビンソン・クルーソーが赤ん坊のときから隔離された孤島に育ったと仮定すると、「ヒトではあるが人間ではない」と言えるのか、ということへの別の仕方での説明でもあるだろう。然るべき状況を経験して初めて、人間は人間性を、然るべき形で身につけることができるというわけである。

ここで注目すべきなのは、「インプリント」にはデコイを追いかける雛のように、生物学的に本来想定された形での「インプリント」に失敗し、想定外の形で行動が固定されてしまうということがあり得ることである。この「ミス・インプリント」という事態は、しばしば本来の生態環境とは異なる檻などで育った飼育動物などで見られる。

「グルグル回るだけで、ぜんぜん飛べないというムササビが出ました。ただ、グルグル回るところは、生得的に自分で飛ぼうという衝動があって、そう行動するということを表現していますが、逆に言えば、ゆがんだ形でその行動が現れてきているわけです。」（小原 1984：94）

生物にはそれに相応しい存在様式というものがあり、それぞれに相応しい「ハビタット」と結びつくことで、生物は本来の能力を身につけられる。ここで重要なのは、これが人間の場合にはどうなのかということである。先に見たように、人間にとっての「ハビタット」とは「社会」という「モノ」によって形作られた人工生態系であった。つまり「ヒト」は「社会」によって「インプリント」されるのである。確かに自己家畜化によって「モノ」の姿も、それを媒介して現れる「人間」の姿も変容していく。しかし人間にも、やはり生物として遺伝的に受け継いだ「相応しい形」があるのではないか。すなわちこれが、小原の言う人間の「自然さ／ナチュラルさ」という概念に他ならない。

「人間の自然さとは、したがって生物の野性とは、全く異なる。いわば人工環境の中にある。それでいながら、完全な人工ではない。……どのくらいの人工化がよいのかも、歴史によって変化しよう。しかし、それには限度もまた存在する。」(小原 1972 : 114)

「自然な／ナチュラルな」ものとそうでないものの区別を示す例として、しばしば小原があげるのは、「庭イヌ」と「座敷イヌ」の違いである。

「今のイヌは野に放り出されて、オオカミやライオンがいるところではとてもうまく生きてはいけない。……[しかし庭イヌの場合]餌はもらっているが、家畜としては、かなりイヌの性質にあったような癖や行動を発達させる自由がある。……イヌの性質としては何か適している。ナチュラル

な家畜化の典型と見える。それと比較すると、座敷イヌがよく吠えたり、イヌを見て恐がったり、歯槽膿漏や慢性胃炎にかかったという話を聞くと、自然な状態の家畜化と、ペットになりかかっている異常な状態での家畜化という二つが典型的に見える。」(小原 1995 : 58-59, [] 内および強調は筆者)

要するに、小原が問題にしている人間の「自己ペット化」とは、現代社会において、そこで行われる「インプリント」の形が、人間本来の「ヒト」としての「自然さ／ナチュラルさ」との間で整合性を失ってしまい、人間自身にその歪みが病理的な形で現れてくる状態のことを指すのである。若干紛らわしいのは、「自己ペット化」を招いてしまった「自己人為淘汰」の原理そのものは、「ヒト」として「自然な／ナチュラルな」ものである、ということである。つまり現代社会というのは、「ヒト」の「自然な／ナチュラルな」性質の発露として、人類史を通じて「モノ」が蓄積されていったが、あまりに膨張した「モノ」がやがて「ヒト」に想定されていた「自然な／ナチュラルな」範疇、「ヒトとしてのある種の妥協点」(小原 1984 : 100)を越えてしまった時代として位置づけられるのである。

それではこの「自己ペット化」という事態に、われわれはどう向き合っていくべきなのか。確かにわれわれが「人間(ヒト)」である限り、「自己人為淘汰」の原理から自由になることはない。しかし、その“方向性”は定められていないのである。つまりわれわれは社会を、改めて人間にとって「自然な／ナチュラルな」方向性、それに相応しい形に変えていくことはできる。つまりここにある“自由”こそが、小原の結論なのである。

「現代の人間たちが表す行動、そしてさまざまな若年の成人病やとくに精神病的行動（病気と断定される以前の状態）の中に……ヒトへの人為淘汰の結果が現れている。……人為淘汰を受けることを確認した以上、それが幸いに自己によるのだから、人為淘汰の仕方を変えればよいのである。……人間（ヒト）そのものに対応した社会または文化（自然）となればよいのである。」（小原 1995：170）

3 「自己家畜化論」の再検討

（1）「自己家畜化論」に含まれる矛盾と“アキレス腱”

以上を通じてわれわれは、小原の「自己家畜化論」の全体像を確認してきた。われわれはその作業を通じて、小原の議論に含まれる“人間”や“社会”に対する、彼のユニークな着想について確認することができたと思われる。しかしこうした「自己家畜化論」のさまざまなエッセンスは、残念なことになかなか理解されにくい。もっとも多いのは、先に指摘したセンセーショナルな響きから、議論が「人間と家畜との類似性」に集中してしまい、その先の本質に向かわないというケースである（小原 1995：126, 2000：138）。しかしこの問題は、われわれが一連の議論を「自己家畜化論」と呼ぶ限り、おそらく避けられそうにない。特に家畜と人間の形態的類似性をその根拠として用いる以上、家畜と人間の比較に議論が集中するのは、やはりやむを得ないと言わなければならない。

また小原の議論に、実際にはさまざまな矛盾が含まれているのも事実である。例えば「自己人為淘汰」の概念にしても、それを果たして「淘汰」と呼んで

いいのかという問題がある。一般的に生物学的な文脈で「淘汰」と言う場合、そこには“選択”によって生じた遺伝的な形質変化が想起されるが、自己家畜化も「自己人為淘汰」も、変化したのは「インプリント」の仕方であって、原理的には遺伝的な形質変化を問題にしたものではなかったはずである。「ほぼ三万年余り、ホモ・サピエンスの形質は変わっていない。変化したのは行動であり、生態である」（小原 1995：137）と、小原自身が言うようにである。

しかし他方で「歴史的には獲得形質が遺伝するとさえ言えるような自然の現実形態がある」（小原 2000：208）と指摘するように、どこかで小原が「自己人為淘汰」を遺伝的な形質のレベルにまで及ぶ現象として理解していたように筆者には読める。さらに小原の議論では、家畜に現れる特徴である、例えば部分的な長毛などの変化は、環境の変化による生理現象の乱れ、ホルモンの変化とされている（小原 1984：30）。要するに家畜であれ人間であれ、形態的・生態的变化が「ホルモン変化」、「インプリントの変化」、「遺伝形質の変化」という次元の異なるレベルで論じられながら、その整理が不十分に見えるのである（本論では踏み込む余裕がないが、他にも「ヒト化」と「人間化」をめぐる概念的矛盾もある）。

とはいえ「自己家畜化論」の“アキレス腱”は、やはり上記のように自己家畜化という概念そのものではないだろうか。自己家畜化を用いる限り、われわれは「人間はどこまで家畜か」という問題に束縛され続けるだろう。「自己人為淘汰」というタームの「淘汰」についても、それが家畜に生ずる「人為淘汰」との概念的整合性に基づいて構想されたのは明らかである。

(2) なぜ小原は“自己家畜化”概念にこだわったのか

とはいえ、なぜ小原は“自己家畜化”という概念にこだわり続けたのか。興味深いのは小原が一連の議論を構築するにあたり、これまで見たように「人間と家畜の類似性」から出発し、「自己人為淘汰」という原理的説明を経由して、最後に社会批判のための「自己ペット化」へと至る、という順序で問題意識を展開してきたわけではないということである。実際には逆であり、小原にはもともと「自己ペット化」に相当する問題意識があり、それが人間独自の進化理論へのアイデアを促し、最後に自己家畜化の概念によってそれらが結びつけられた。そのように理解できるということである。

例えば“人間の危機”に対する小原の問題意識は、すでに『21世紀の人類』(1963)においても明確に見ることができる。小原にそれを促したのは、現代人の姿と同時に、環境問題の出現であった(小原1970a)。例えば「人間とは何か——人間学の建設のために」(1970b)では、自己家畜化についてはわずかに言及があるのみだが、そこにはすでに「自己ペット化」で小原が表現しようとしていた内容が先取りされている。

「科学技術はあたかも万能であるかのように思えた。しかし、人間はヒトでもある。即ち生物としての人間でもある。そこに生物的法則性から離れた技術で全てを律しようとしたために、それが進むにつれて矛盾が出はじめ、またコントロールの方法でカバーがしきれなくなった。にもかかわらず、その方法で人間の方にヒトとして我慢を強いた……。それでいながら、嵐のような発展があったので、人間の中のヒトが悲鳴を上げたのである。

……このような従来の方法による発展が進行すればするほど、このヒトと人間とのギャップは大きくなり、ついには分裂して人類に何か重大な変化が起りそうな点である。……われわれは新しい科学技術を見つけ出さなければならない。人間とも、そのうちに含まれたヒトとも相対立しない、ナチュラな方法が探られる必要がある。」(小原1970b: 247-251, 強調は筆者)

いずれも推察ではあるが、小原が自己家畜化概念にこだわり続けたのは、この概念が彼の問題意識を表現するツールとして魅力的だったからではないだろうか。例えば彼が後に「カプセル化」と呼んだ、「モノ」が人間を包囲し尽くした世界に生きる現代人の姿は、彼の中では「家畜化」という表現にうまく符合していたかもしれない。しかしそれ以上に重要なのは、やはり「人間と家畜との形態的類似性」という根拠を用いて、小原が自説を自然科学的に通用するものに仕上げたかったからではないか。小原の議論はある意味では哲学的な要素を含み、すべてを実証するのは困難である。しかしそれを人間と家畜の類似性という次元に落とし込むことができれば、議論を科学的な実証の土俵にまで上げることができるのである。しかしこれまで見ように、この意図こそが彼の思想への誤解を生み、不毛な論争へと至らせる逆説的な結果を生んだのであった。

本論が注目したいのは、小原の展開した理論的枠組みが、必ずしも自己家畜化という概念、あるいは「家畜と人間の類似性」という論点を経由しなくとも、実際十分に成立しうるということである。例えば自己家畜化は理論上「自己人為淘汰」とほぼ同義である。「淘汰」という部分が問題になるのであれば、他の表現でも構わない。繰り返すように、小原

の議論の核心部分は「家畜と人間の比較」にあるのからである。
ではなく，“人間”，“社会”，“自然生態系”それぞれの関係性を捉えるユニークな着想にこそある

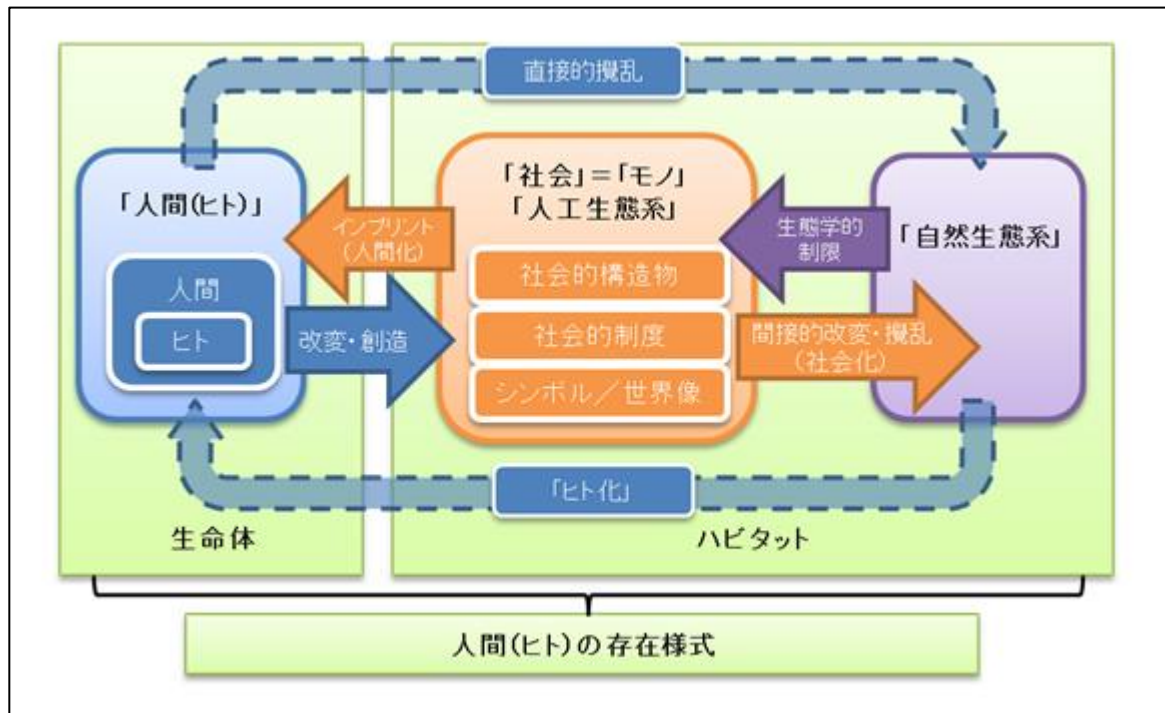


図1. 小原の“人間学”における“人間”，“社会”，“自然生態系”の関係性

4 総合人間学的理論の萌芽としての諸論点

(1) “人間”，“社会”，“自然生態系”の関係性を問う

以上を踏まえて、ここでは最後に小原の「自己家畜化論」に含まれるエッセンスを、敢えて「家畜と人間の類似性」を引き合いに出さずに再構成することを試みたい。図1は、小原の議論をもとに描き出せる，“人間”，“社会”，“自然生態系”のそれぞれの関係性に関する模式図である。

最初に「人間（ヒト）」に着目して欲しい。「人間（ヒト）」は、生物学的な基礎である「ヒト」を母体に、社会的に「インプリント」されることによって「人間」になる。「ヒト」の起源は数百万年にお

よぶ自然淘汰にあり、その意味で「ヒト」には過去の時代の自然生態系との関係性が内包されているといえる。当初は、自然生態系からの影響が全てであったが、やがて「ヒト」が進化の過程で「モノ」を生み出すようになると、そこに「社会」からの影響が加わることになる。

ここでいう「社会」とは、人間の生み出す「モノ」の体系であり、同時に「人間（ヒト）」と自然生態系とを媒介する「人工的生態系」でもある。このとき「社会」＝「モノ」の体系には、質的に異なる少なくとも三つの要素を含むと考えられ、筆者は便宜的にそれらを区別する。「社会的構造物」とは、いわゆる「道具」をはじめ、農耕地、建築物といった

自然の人為的改変によって生み出された“物質的な”構造物である。これに対して“非物質的な”ものとして、「モノ」を組織化し集団的に管理するための「社会的な制度」と、概念や思想などを含んだ「シンボル／世界像」が存在する。後者の二つを「道具とその派生物」と言い切るには検討の余地があるが、いずれも人間が生み出したものでありながら、同時に人間を規定する力を持つという点では、共通しているといえるだろう。

また以下は図示されてはいないが、ここでの「人間（ヒト）」、「社会」、自然生態系の関係性は、人類史を通じて一様ではなかった。例えば農耕の成立は、この関係性に第一の質的転換をもたらした。農耕以前の世界においては、「人間（ヒト）」と自然生態系を媒介する「社会」の層は薄く、その影響は限定されたものであった。しかし農耕の本質とは「人間（ヒト）」の生存基盤を全面的に「人工生態系」に置き換えることであり、それに伴う定住化は「モノ」の蓄積速度を格段に上昇させた。これを契機として“人間”と“自然”の関係性は、「社会」＝「モノ」を介した間接的なものへとほぼ全面的に移行したのである。

この関係性において生じた第二の質的転換は、いわゆるエネルギー革命を含む産業革命である。農耕以後、自然生態系からの淘汰圧は、自然を社会化していく「社会」＝「文明社会」に対する生態学的制限として機能していた。生態学的な適応ができなくなると、当時の「社会」は崩壊した。しかし「社会」のエネルギー的基盤が化石燃料に移行すると、「モノ」の体系は生態学的制限を失い、自然生態系を一方的にコントロールする形でさらなる膨張をはじめようになる。そしてこの歯止めを失った「モノ」の膨張が、いまや全地球的な自然生態系だけでなく、

人間の内なる自然である「ヒト」との間においても相克し、“環境危機”と同時に“人間の危機”を引き起こすようになるわけである。

(2) 総合人間学のための「本性論」と「文明論」の萌芽

ここで取り上げた枠組みは、確かに細部においてさまざまな検討が必要であろう。しかし「人間と家畜の類似性」に言及せずとも、小原の人間学的エッセンスを理論的に再構成できることは、一定の形で示せたのではないか。筆者はこの枠組みの中に、総合人間学独自の理論的枠組みを構想する萌芽が含まれていると考える。ここではそれを便宜的に「総合人間学的本性論」、「総合人間学的文明論」と呼び、その概観を示しておきたい。

まず「総合人間学的本性論」とは、人間の生物学的基盤である「ヒト」と「インプリント」を媒介した「人間化」の研究であると言える。特定の性質が“生得的”なものか、あるいは“学習”によるのかという二元論には長い歴史があるが、近年の脳神経科学と分子遺伝学の発達によって、この傾向は一段と顕著になっている。かつて小原は「サル中心主義」（小原 1970b：238）と呼んだが、類人猿の実験から人間の遺伝的基盤を読み解こうとする研究が盛んに行われている（Pinker2002）。

しかし小原の示した人間像はそれほど単純ではない。例えば生物の存在様式、それは生命体とそれ自身の「ハビタット」が結びついて初めて本来の姿となり、「人間（ヒト）」にとっての「ハビタット」とは、自然生態系を改変した「人工的生態系」であった。これは「人間（ヒト）」の特殊な性質であり、その点で異なる類人猿からの類推は必ずしも万能ではないのである。またわれわれは「人間（ヒト）」

の本性を問題にする際、「ヒト」と「人間」の二重性を念頭に、「遺伝的基盤」、「インプリント」、「学習」という三つの次元を同時に考慮していく必要がある。そして特に現代社会におけるライフスタイルが、人間の「自然さ／ナチュラルさ」との間で不整合を起こしているならば、その「自然さ／ナチュラルさ」の研究は不可欠といえるだろう。重要なのは、「ヒト」の遺伝的基盤の特定が、必ずしも「自然さ／ナチュラルさ」の解明を意味しないということである。

次に「総合人間学的文明論」は、小原の議論から浮かび上がる、特殊な「社会」の概念によって、“人間”，“社会”，“自然生態系”を包括的に捉え、人類史を新しく読み解いていくという試みである。その一部分は先に紹介したが、この枠組みは本質的な新しさを持っている。これまで“人間”と“社会”の関係、あるいは“人間”と“自然”の関係については、それぞれ人文社会科学の長い蓄積があったにも関わらず、そこでは往々にして“自然”が“人間”に対置される“社会”の付属物になるか、“社会”と“人間”の区別が曖昧なまま、一緒に“自然”に対置される場合がほとんどであった。「人間（ヒト）」が生み出すと同時にその存在形態を規定し、また「人間（ヒト）」と「自然生態系」を媒介するという「社会」の概念は、本質的に新しいのである。

ここでの「本性論」と「文明論」が「総合人間学的」である理由は、これらの枠組みを次の段階へと進めるためには、人文社会科学と自然科学の“総合”が必要となるからに他ならない。特に、「社会」の概念を深めるためには人文社会科学の力が必要であり、「人間化」と「自然さ／ナチュラルさ」の解明には自然科学の力がある。一般的なキーワードを分

野横断的に論じるのではなく、枠組みを“総合的に”展開させるのである。

(3) 結びにかえて

以上を通じて、われわれは小原の「自己家畜化論」の再読を試みてきた。われわれは小原がまいた種を、枯らすことなく育てていく必要があるだろう。ここでは最後に、われわれにとっても未だに“初心”となるだろう、小原の言葉を引いて結びとしたい。

「科学的な人間観とは何かである。……最近、人間について発言する人が、生物学や人類学の側から増加している。しかし、その多くが既存の科学の枠の中だけで論じている。人文社会科学についても同様に、前述した動物学的行動学などの成果にかたくなに目をつぶり、人間は社会的存在であるということだけをひたすらに強調している。……悪しき客観主義、実証主義を捨てて、理論は大胆に、実証は慎重に、タブーとされてきた意味を問い、人間の全体像を問うことが、今やなされなくてはならない。」（小原 1970b : 260-261）

参考文献

- 上柿崇英（2013）「学問としての『総合人間学』の課題」『3. 11 を総合人間学から考える』総合人間学会編，学文社，pp. 142-146
- 江原昭善（1971）「自己家畜化現象」『自然』4号，中央公論社，pp. 72-77
- 小原秀雄（1961）『動物社会記』三一新書
- 小原秀雄（1963）『21世紀の人類—人間ホモ・サピエンスはどこへ行く』講談社
- 小原秀雄（1968）『動物の科学』国土社
- 小原秀雄（1970a）「自然の変革と人間の未来」『人

間の動物学』季節社, 1984, pp. 273-294

小原秀雄 (1970b) 「人間とは何か—人間学の建設のために」『人間の動物学』季節社, 1984, pp. 243-272

小原秀雄 (1972) 「人間にとっての自然さ, “ナチュラルなありかた” について」『女子栄養大学紀要』3号, pp. 109-114

小原秀雄 (1973) 「人間の自己人為淘汰について」『女子栄養大学紀要』4号, pp. 125-130

小原秀雄 (1978) 『環境と人類』共立出版

小原秀雄 (1981) 『街のホモ・サピエンス』合同出版

小原秀雄 (1984) 『自己家畜化論』群羊社

小原秀雄 (1985) 『人(ヒト)に成る』大月書店

小原秀雄 (1995) 『ペット化する現代人』NHK出版

小原秀雄 (2000) 『現代ホモ・サピエンスの変貌』朝日選書

尾本恵市 (2002) 『人類の自己家畜化と現代』人文書院

S. Pinker (2002) The Blank Slate: the Modern Denial of Human Nature, Penguin Books 『人間の本性を考える』(山下篤子訳) NHK ブックス

上柿 崇英 (大阪府立大学)